

中学校国語科で一人一台のタブレット端末を活用した実践報告

－プレゼンテーションアプリを活用した事例－

坂口友視（松阪市立三雲中学校）

概要：タブレット端末を活用した中学校国語科の実践に取り組んでいる。「受信（主に聞くこと・読むこと）」「発信（主に話すこと・書くこと）」「そこに生まれるギャップ」の3点を柱にして「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」の育成を目指し、実践を重ねてきた。多様な情報を整理するために情報を可視化すること、言葉を吟味する思考の過程を保存できること、一覽で他者の考えを参考にできることなど、タブレット端末の活用効果を感じている。今回は、生徒自身が自分の読み取ったことをプレゼンテーションすることで、根拠をより明確にしたり、多様な視点から考えたりすることを目指した実践を報告する。

キーワード：中学校国語科，タブレット端末，読解，プレゼンテーション

1 はじめに

本校の第1学年の生徒は、授業に積極的に取り組む姿が印象的である。正解のある問いには多くの生徒が積極的に発表するが、個人の考えを発表するには少し抵抗がある様子である。また、言いたいことがあるにも関わらず、その内容が整理できず、内容がまとまらないまま発表をすることがある。自分の考えを発表することに課題がある印象をうける。

平成29年に示された学習指導要領では、国語科で育成する資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と規定し、「国語で正確に理解し適切に表現する際には、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことの『思考力、判断力、表現力等』のみならず、言葉の特徴や使い方、情報の扱い方、我が国の言語文化に関する『知識及び技能』が必要となる。」としている。

そこで「受信（主に聞くこと・読むこと）」「発信（主に話すこと・書くこと）」「ギャップ（を意識すること）」の3点を柱にして資質・能力の育成を目指し実践を重ねてきた。今回は、生徒自身が詩から読み取ったことをプレゼンテーションという「発信」する活動を通して、絵や図

を用いながら、自分自身の言葉でまとめ、表現させることを目指した。プレゼンテーションを通じて、受信者を意識してわかりやすく伝わる表現の工夫をするだけでなく、生徒たちが主体的に、自分自身の読み取った根拠を明確にして思考過程や要点を整理すると考えたためである。

2 研究の方法

（1）調査対象および調査時期

対象：松阪市立三雲中学校1年生

時期：平成30年6月～7月

（2）調査課題

教材：「詩の世界」（光村図書）

作者の詩に対する思いが書かれた導入の文章と、「てがみ」「太陽」「魚と空」の三編の詩からなる教材である。

活動計画：詩を読むときの観点を導入の文章から読み取る。また、その観点をもとに詩を読み解くことで、詩を読むときの観点を「自分で使える知識」として主体的に捉える。さらに、自分が詩から読み取った内容をプレゼンテーションすることで、詩から受けるイメージや印象はいったいどこから生まれてくるのかなど、根

拠となる本文や言葉、表現を捉え、自らの考えや思いを再構築する。(表1)

(3) 調査方法

授業の最後に「どんなことを学んだか」「どんなことがわかったか」自由記述のふりかえりアンケートを行った。

表1 「詩の世界」活動計画

第1時	これまでの詩の学習を想起させ、なぜおおよそ共通したイメージを持つのか予測させる。導入の文章と既習事項と重ね合わせる。
第2時	作者の考える「伝えるために」することと、「詩を読むこと」を自分の言葉でまとめ、読むときの観点を整理する。
第3時	前時に学習した観点をもとに「魚と空」の「伝えるため」の工夫や「読む」ためのポイントを確認する。
第4時	各自担当の詩を決め、生徒自身の考える「伝えるため」の工夫や「読む」ためのポイントを解説するプレゼンテーションを作成する。
第5時	それぞれプレゼンテーションを通して、自分が詩を読んだときのイメージとの共通点や相違点をまとめる。

3 結果

(1) 実際の様子

第4時は自由度が高く生徒たちは「どうしたらいいのか」「何からはじめるのか」という様子であったが、『それぞれの詩に込められた作者の思いは何だろうか』を根拠を持って説明することができればよいとめあてを示すと、集中して取り組むことができた。

プレゼンテーション作成の際には、資料集で表現技法を確認したり、ノートを見返したりしていた。本文をコピーして書き込む生徒や、本文を打ち込む生徒、読み取りを文字でまとめる生徒やキーワードだけ打ち込んで説明しようとする生徒もいた(図1)。他にも、はじめに本文にたくさん書き込んだ後、伝えたい情報や必要

な情報だけを残し、不要な部分を削除する生徒(図2)や、自分の伝えたいポイント1つにつきスライド1枚と、分割した資料を作成する生徒(図3)もいた。

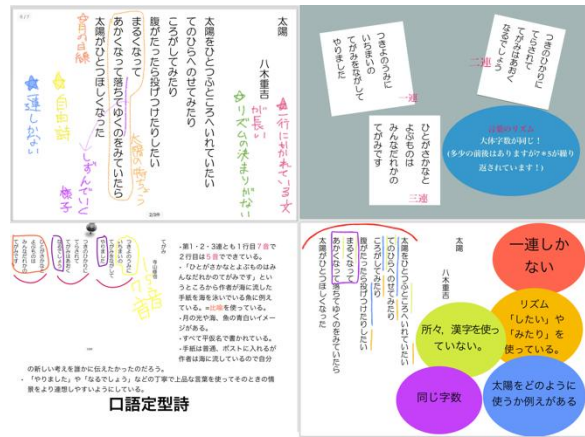


図1 生徒の作った資料①

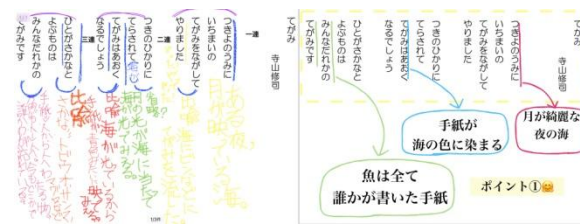


図2 生徒の作った資料②

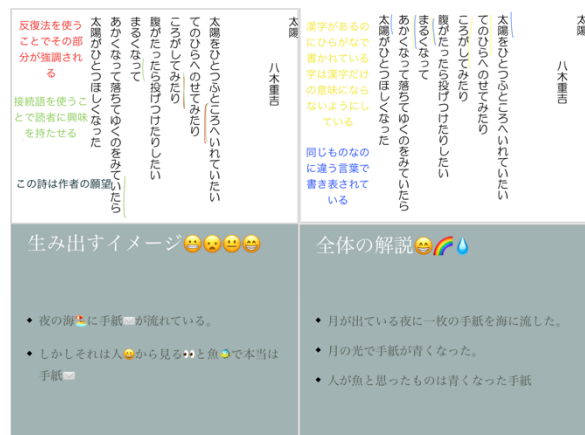


図3 生徒の作った資料③

(2) ふりかえりアンケート

『てがみ』には、てがみを魚に例えるという比喩表現が使われていることがわかった。「表現技法により、てがみの存在を強調したいことがわかった」『太陽』をまるでおもちゃのよう

に表現することで自分の願望を表していると思った」など、表現技法や表現の特徴を根拠に読み解いている生徒がいた。

『あかくなって落ちてゆく』は夕日が沈んでいく様子を表して…』『してみたい』というところから遊び心があると思う「実際にはできないことを『したい』と言っているので、作者は叶わない願望があると思う」など詩に使われた言葉を根拠に自分の解釈を書く生徒がいた。

『てがみ』を読んでよっぽど誰かに伝えたい思いがあるんだと思った』『太陽』から作者はほしいものがたくさんある人だと思った「てがみが海を漂っている感じを受けた」など、具体的な根拠はないが、詩から想像した作者の思いや自分なりの解釈を書く生徒がいた。『太陽』には強さのイメージがあると思う。作者は強くなりたいたいかも」など自分の経験とつなぎ合わせる生徒もいた。

プレゼンテーションの活動そのものに対する記述もあった。その内 19%は「見づらかったから、次はみやすい資料にしたい」「他の人の説明を聞きながらメモをとれてよかった」「絵を使ってポイントをまとめることができた」など活動に対する記述であった。残りは「班の人が発表してくれて『太陽』が願望を表しているとわかった」「詩の説明を書くために積極的に意見交流できて『てがみ』の切なさを感じた」「実際にプレゼンの資料をつくったり、発表したりして内容がわかった」など活動による具体的な成果を記述していた。「他の人の発表を聞いて、同じ『太陽』でも気づかなかったことを知ることができた」と、活動により新たに気づいたことを書いている生徒もいた。

「詩とは『何か』を表現するものだとわかった」「目線を変えたらいろいろ見つけられた」「連想するものがたくさんあった」など、漠然とした気づきの記述が見られた。

その他には、「目標を達成できてよかった」「作者の考えがわかった」「人それぞれの感じ方があるとわかった」との記述があった。

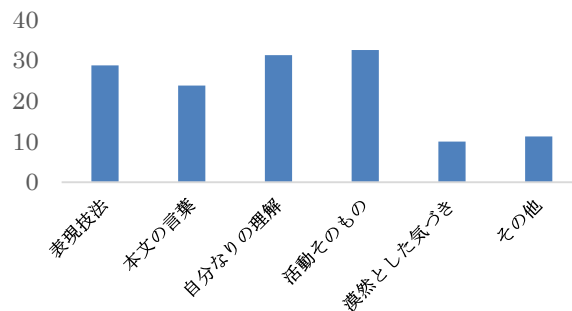


図4 ふりかえりアンケート結果分類 (%)

4 考察

今回、自分の読み取りをプレゼンテーションする活動を通して、言葉の背景・詩に込められた意味を根拠を持って読み取る力の育成を目指した。

まずは、自分の読み取りを明確な根拠を持って、読み取りができたかを考察する。実際の様子では、本文や資料集など根拠を求めて調べる姿が見受けられた。ふりかえりアンケートの結果を見ると、表現技法や表現の特徴、詩の使われている言葉など、具体的な根拠を取り上げている生徒が多くいた。アンケート自体には具体的な根拠なく、自分なりの想像や解釈だけを記述している生徒も、プレゼンテーションを見ると、本文に線が引かれていたり、解説がされていたりと根拠が明示されていた。例として、図5にアンケートで『太陽』の作者は何か叶わない願望があると思う」と答えた生徒のプレゼンテーション資料の一部を示す。

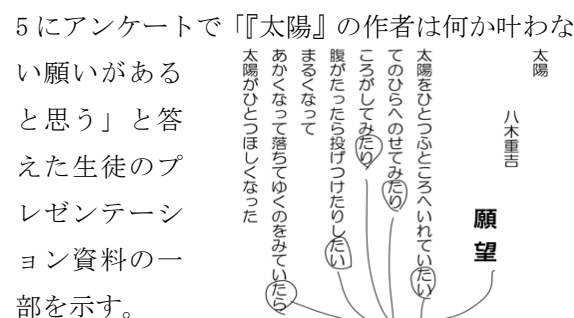


図5 生徒の作った資料④

次に、活動の適性を考察する。生徒たちは、これまでプレゼンテーションを行うにあたり「何を伝えたいか」伝えたい事柄を明確にすること、「どうすれば伝わるか」相手への伝わり方を意識する必要があることは学習していた。今回、『それぞれの詩に込められた作者の思いは

何だろうか』を根拠を持って説明する」というテーマに沿って、プレゼンテーションを行ったことで、「何を伝えたいのか」を考えるにあたり、自ずと生徒自身の読み取りの根拠を明確にすることができていたと考える。なぜなら、本文に書き込んだあと伝える要素を吟味する様子から「どこを人に伝えた」ら自分の読み取りが伝わるのかを試行錯誤していたと捉えたためである。また、スライドを分割して作成する様子から、伝えたいことをわかりやすく伝えようと取り組んでいると考えたためである。ふりかえりアンケートにも、活動による成果を記す生徒がおり、プレゼンテーションという活動自体が意見交流を促し、その結果根拠を持った詩の表現の解釈ができたと考えられる。プレゼンテーションを通して人に伝えることを意識することで、明確な根拠にたどり着くことができたのではないだろうか。

これまでも国語科では他者に説明する力を育成する上でプレゼンテーション活動を行ってきた。説明するためには、自分の知識の整理や情報を吟味することが必要である。これを活用し、自分の読み取りをプレゼンテーションすることで、読解力を向上させるトレーニングにもなるのではないかと考えた。

5 結論

詩の読解において、プレゼンテーション活動は、他者に伝える意識を持つことで自分の考えを再考して再構築するため、読み取りの根拠を明確にすることができた。また、「何を伝えたいか」「どうしたら伝わるか」を考えることで、自分の意見・思いをより焦点化し強調できた。プレゼンテーション活動は、自分の中にある漠然としたイメージを、根拠を持った意見として表現することに有効であるといえる。

また、その活動にタブレット端末を用いることは、従来から言われている通り、何度も消したり書いたりできる「修正の容易さ」、自分の書いたものの配置を自由に動かせる「思考の可視

化」など、試行錯誤する場として効果的であった。

6 今後の課題

プレゼンテーション活動などの発信する活動を取り入れることで、他者に伝えるために、自分の読み取りに立ち返り、自分の考えや思いを再構築する機会となった。そのため、詩を読むときの観点が、使える知識として定着する助けになることが推測される。また、実際にどんな観点で読解しているのか、どこまで理解が深まっているのかを確認するひとつの素材にもなると思う。詩の読解に留まらず、説明的な文章や物語文・小説、随筆など多様な文章の読解において発信する活動を取り入れて、今後検討していきたい。

また、今回の実践では「多様な視点から考える」ことにつながる結果が得られなかった。ふりかえりアンケートの際、自分の学んだことについて「他の人の意見や具体的な例を必ず示すように」と伝えていれば、「〇〇さんのこういう意見が参考になった」「〇〇という新しい見方に気づけた」など、多様な視点から見ること意識させることができたのかもしれない。今後、生徒への示し方の工夫を重ねていく必要がある。

参考文献

- 長谷川元洋, 三雲中学校 (2016) 無理なくできる学校の ICT 活用. 学事出版
- 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示)
- 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領解説国語編
- 文部科学省 (2017) 次期学習指導要領で求められる資質・能力等と ICT の活用について
- 梅津健志 (2007) 国語とプレゼンテーション. 学習情報研究 2007 (9) : 48-49